

## 「新人」弁護士のうちにしておくべきこと



会員 丸山 由紀

### 回り道をして

私は、大学では外国語学部スペイン語学科という、まるで法律とは縁遠い分野を専攻した。社会人になってから、他の分野で仕事をした末に弁護士になろうと思いつき、旧司法試験の合格者が減り始めた年に合格することができた。修習を終えると同時に、受験時代に職員として在籍していた法律事務所に弁護士として就職した。不動産会社等の企業の仕事と、在日外国人の権利擁護に関する仕事という、まったく異なる2つの分野の事件を手がける上司のもと、職員時代や修習生時代には傍らでみていた業務ひとつひとつに、右往左往しながらも取り組んでいる。

他人よりも回り道をして弁護士という仕事について、法曹界以外の同世代の友人・知人、例えば学生時代の同級生で、最近になってキャリアチェンジをして新しい仕事を始めた、という話はほとんど聞かない。しかし、法曹界に限って言えば、さまざまな経験を経て、同世代で弁護士としてスタートする仲間も珍しくはない。年齢を問わず門戸を開いて受け入れてくれるこの業界の懐の深さには、とても感謝している。

縁あって東京弁護士会に登録し、「外国人の権利に関する委員会」に見学者として出席させていただくなど、諸先輩方からさまざまなことを学ばせていただいている。

### 汗をかくための時間を

早いもので、昨年の9月に弁護士登録をしてから、もうすぐ半年がたとうとしている。私たち旧61期の新人弁護士が登録した3ヵ月後には、法科大学院を卒業した新61期の弁護士が新規登録し、出かけた先で顔を合わせることも多くなった。あと6ヵ月もすれば、次の旧62期の弁護士が登録してくる。

登録すればその日からプロで、新人などという言い訳は許されないのが弁護士だが、現実を見てみれば、弁護士としての知識にせよ、経験にせよ、圧倒的に先輩方には及ばない。依頼者が身を置いている業界の知識、依頼者や相手方の気持ちの機微なども、ひとつひとつ現場で学んでいくしかない。

そんな、客観的には足りないところばかりの新人弁護士の存在意義はどこにあるのか。かつて司法研修所の教官から言われ、また、弁護士になってから先輩方に言われているのが、とにかく労を惜みず、記録を読み込み、文献にあたりなさい、ということだった。「新人のうちには時間があるのだから」と。自分でも、圧倒的に足りない経験をカバーし、今後、弁護士としてやっていくベースとなる力をつけるには、それしかないのだろうと痛感している。ただし、言うは易し、行うは難しで、実際に仕事についてみると、目先の業務に追われて、あっという間に時間が過ぎていく。業務の進め方を工夫して、「汗をかくための時間」を確保しなければ、と痛感する毎日だ。

### 大変な時代に

ところで、以前に職員として働いていた事務所に戻って感じるのは、昨今の社会や経済の情勢を背景に、依頼者をとりまく状況も、いろいろな意味で厳しさを増しているということだ。大変な時代に弁護士になったものだ、と思うこともある。しかし、こんな時代だからこそ、厳しい状況に置かれた依頼者のために、できること、しなければならないことも多い。目の前の依頼者の課題に、ひとつひとつ丁寧に取り組みながら、弁護士としての経験値を上げてゆくことが、新人弁護士として今の自分がしておくべきことだと思っている。